世界の平和を願って　　北原八惠子

東京湾を埋立てできた公団住宅に住み、45 年過ごし、当時砂漠のような、砂埃のみのこの地も、今は、四季を感じ、春には「うぐいす」や「目白」まで訪れ、秋には、蝶や「トンボ」が飛び、夕暮れには、美しい鈴虫や「コオロギ」の奏でる音が聞けます。私は健康な身体とは言えないのです。成長期に食料もなく飢えたまま成長し、結核を患い、薬もない時で、治療の不備で膿胸となり、その後遺症のため、肺は「ボロボロ」。昨年、脳梗塞を患い、入院。脳の血管も「ボロボロ」と医師に言われます。それでも、今が一番心休まる幸せな日々です。この幸せがつづきますように、願っています。

私の戦争体験は、幼い 5 歳頃の日中戦争の頃からです。戦死した親戚の人が、英雄として祀られ、親戚一同、市電の一車に乗せられ、電車の通る両側に大勢の人が頭を下げる中、遺族の一人として電車の中に立たされ、子ども心に何か誇らしく感じていたのです。

日中戦争が日本のおごりとして、後の地獄の入口とも知らずに、日本海軍が、真珠湾奇襲攻撃を引き起こし、太平洋戦争になり、当初のラジオ放送「大本営発表」では、連日勝利で喜びに溢れていたのです。「シンガポール・マニラ」など占領。当時我家は大阪に住み、父は私が 2 歳の時、病死。長女の姉は自立してアパートに居ました。家には、母と次女の姉と私の 3 人。

兄は高専の学生でしたが、学徒出陣で、海外の行先も家族にも知らされず、徴兵されたのです。出征で汽車に乗る兄を見送る家族の中、私は大声で泣きました。兄は父の代りです。戦局は悪化。サイパン島の陥落に、毎夜、日本の空を B29 が飛び、寝れません。私は 13 歳、高等小学の生徒。学徒動員で製紙工場で働かされ、ある日、雪の降る屋外で、曲がった針金をのばす仕事で、あかぎれで赤くはれた手は、血がふき出してくるのです。夜、母はその手に薬を塗りながら泣きました。「お上は何をしているのか」と。

昭和 20 年の 6 月、空襲警報の後、警報解除の放送で、皆ホットしている中、急に爆音に襲われ、姉は私におおい被さり、必死で防空壕に入り、母に夏布団を渡され、それを水につけ、頭から被り、母の声を頼りに逃げるのです。炎と煙で何も見えない中、人の悲鳴を聞きながら、上から落ちる火の中を走るのです。家は焼かれ、働いていた工場もほとんど焼失しました。それでも、その時は、母や姉と共に居たので、恐怖の中でも耐えられました。2 日後、工場に行くと、20 人ほどの友人も 3 人しか会えません。安否も分からず、調べようもありません。すべて焼け野原です。その日より 1 週間後、姉のアパートから工場に市電で通う途中、空襲におそわれ、駅前の防空壕に入ろうとしたのですが、大人の男の人に「一杯だから」と追い出されたのです。人の姿もない火花の散る路面電車の道を動く私の後ろから、敵機の直射攻撃を受けながら、方角も分からないまま逃げるのです。やっと防空壕を見つけ、入れてもらうことができたのですが、男の人の声が、「早く防空壕から出て逃げろ」と叫ぶ声に、壕から出ると、その人の髪から火が出ているのです。敵機は始めに爆弾攻撃の後、焼夷弾

を落とすので、防空壕より出なければ、家の火災でむし焼きになるのです。このあたりは何度も空襲にあい、その時の犠牲になられた御遺体を、空地や畑に穴をあけ、何体も灯油で焼いたのです。その中を一人で逃げるのです。足には履く靴もなく、下駄を履いていたので、鼻緒が切れ、落ちていた針金ですげました。裸足で焼けた土面を走れません。私はどこへ行けばよいのか分からないまま走りました。痛い足を引きずり、防空壕を見つけ、入れてもらいました。孫とお祖母さんが入っておられ、お祖母さんが、だしじゃこを2尾くださったのです。当時は貴重なものです。有りがたかったので忘れられません。警報解除の後、自分が何処にいるのかも分からず、そこの人に住所を言って送ってもらい、家族に会えたのです。その時、姉のアパートも焼かれたのです。

私は、戦争の恐怖もさることながら、辛かったのは、飢えの苦しみです。豊かな家では、闇物資で食料もありましたが、我家のように稼ぎ手のない家は、配給の「大豆」と家畜の飼料になるような「トウモロコシ」の煎ったものを10粒ほどが1日の食事です。終戦後も続きました。母は私たちより食べていない状態です。出征した兄は、「中支」今の中国上海南京あたりに行っていたので、20年2月、比較的早く帰ってきて、田舎に買出しに行ってくれて、やっとご飯が食べられました。

今は亡き母の言葉を思い出します。

私は防空壕に入れてもらえなかった人を「鬼」と言ったのです。

母は、「人を恨むな。その人を「仏様」と思え。逃げることを教えてくださったのだ」と言うのです。

その母が最後まで恨んだのは、戦争を引き起こした「お上」でした。母は、後半年で学校を卒業でき働ける一人息子の兄を兵隊に取られ、おまけに、たった一人の母の身内の弟は、南方の戦地に送られ、戦死。弟の嫁は、幼い子ども2人を残し、結核で病死しました。戦後帰ってきた母の弟の骨箱には、紙切れ1枚に「氏名」だけでした。その上、なけなしのお金で買わされた国債も、紙屑になったのです。

今、私に出来ることは、悲惨な戦争体験を人々に伝えたい気持ちで一パイです。「広島」「長崎」の人々の苦しみを思うと、今も心が痛みます。日本は世界唯一の原子爆弾の被爆国です。その時犠牲になられた人々の悲痛な叫びを我々は忘れてはならないのです。

戦争のない世界を目ざして、学識のある方々、政治家の皆様、「英智」を平和のために働かせてほしいと思います。国会で「秘密保護法案」が可決され、「集団的自衛権」を認める閣議決定を受けて法制化が進められる中、憲法改正に不安を感じます。戦争の為の同盟国はいりません。地球は一つ。世界の平和のための外交を、政治家の方々に智力を邁進して欲しいと思います。戦争は兵士だけの戦いではありません。女子どもの犠牲の方が多いのです。

①日中戦争の戦死では英雄―戦勝国

②太平洋戦争の戦死では紙きれ1枚―敗戦国

③「お上」天皇や政治家のこと

④大本営―陸海軍を統帥した天皇直属の機関。太平洋戦争の終末まで存続した。